

Title	<紹介>中井賢一著『物語展開と人物造型の論理 : 源氏物語 <二層> 構造論』
Author(s)	後藤, 京
Citation	語文. 2017, 109, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73312
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中井賢一著『物語展開と人物造型の論理―源氏物語（二層）構造論―』

後藤 京

著者・中井賢一氏は、本書において『源氏物語』の物語展開と人物造型を管掌する論理について考証された。書名が示すように、氏の考察の基底には（二層）構造論が据えられている。（二層）構造とは、『源氏物語』の展開を統べる法則を表すために氏が定義された言葉である。

この（二層）構造は、『源氏物語』に登場する二人の源氏―光源氏と夕霧―の対照的な生き様に着想を得たものである。前者は「罪の恋と栄華」の権力体制を、後者は「恋と栄華」の権力体制を樹立した。氏は、光源氏と夕霧を、同等の力を有する（一対）と見なしたのである。従来、『源氏物語』において、「光源氏と頭中将」「夕霧と柏木」が対の存在として認識されてきた。つまり、同年代で、同時期に政界にある二人がそれぞれ（一対）とされてきたのである。しかし、氏はその常識に疑問を投げかける。

源氏父子を（一対）と捉えたとき、『源氏物語』は我々の前にいかなる相貌を呈するのか。また、我々はこの物語のいかなる謎を解き明かすことができるのか。本書はそれを探った一冊である。

参考のために、本書の構成を次に紹介する。

序章・はじめに 光源氏と夕霧

第Ⅰ部 立論篇―（二層）構造論への帰納的アプローチ―

第一章「夕霧（不在）の論理―夕霧の機能と物語の（二層）構造―」／第二章「夕霧（太政大臣予言）の論理―夕霧権力体制の誤算と物語の（二層）構造―」／第三章「夜ごとに十五日づつ―通う夕霧―浮舟の機能と物語の（二層）構造―」／第四章「宇治十帖（解体）と（閉塞）の論理―」

第Ⅱ部 実証篇―（二層）構造論への演繹的アプローチ―

第五章「葵卷（連鎖）の論理」／第六章「若菜（上巻）論―月夜の再登場と朱雀院の機能―」／第七章「明石中宮論―明石中宮の機能と権力機構としての宇治―」／第八章「桐壺帝と左大臣―二つの（違背）と源氏物語の権力体制―」

第Ⅲ部 補論篇―（二層）構造論を支える思考―

第九章「光源氏と絵合―源氏物語の逆説的人物造型―」／第十章「夕霧の元服と光源氏―光源氏と夕霧を切り離す力―」／第十一章「柏木不在の論理―柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造―」

初出一覧・おわりに

右のように、構成は三部から成る。『源氏物語』の構造を考察するために三段階の手順が踏まれたのである。

第Ⅰ部「立論篇」は、「帰納的アプローチ」を試みた四つの章で構成される。作中の「具体的事象」と「謎」の分析を通して、物語構造の定位がはかられた。

対して、第Ⅱ部「実証篇」においては「演繹的アプローチ」が試みられた。〈一層〉構造論を用いて『源氏物語』を考察すること、作中の様々な「謎」が解明されることが証立てられた。

第Ⅲ部「補論篇」は、〈二層〉構造論を支える思考」と位置付けらるべき三章から成る。

以上、概略と構成を述べた。「光源氏と頭中将」「夕霧と柏木」を〈一対〉とする従来説を疑った氏の考察には、着目すべきものがある。本書は、これを読む者に新しき知見を与える一冊である。

(新典社、二〇一七年三月、三九七頁、一、一五〇〇円＋税)

(じことう・みやこ 本学大学院博士前期課程)